

國學院大學学術情報リポジトリ

研究ノート

HSK受験結果に見る中国語圏セメスター留学の学修効果について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐川, 繭子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002085

HSK 受験結果に見る中国語圏セメスター留学の 学修効果について

佐川 蘭子

【要 旨】

國學院大學では、平成19年度より現在に至るまで、毎年度中国語圏セメスター留学を実施している。セメスター留学の学修効果測定のために、参加学生には中国語検定試験であるHSKの受験を課している。本稿は第5回（平成23年度）から第8回（平成26年度）までの4回の留学を対象に、このHSKの受験結果に基づき留学の学修効果検証を試みるものである。セメスター留学は第7回（平成25年度）までは南開大学（天津市）の漢語言文化学院で実施されたが、第8回（平成26年度）は復旦大学（上海市）に変更となった。どちらの大学でも本学学生のみでクラスが構成され、学修内容はHSK 4級取得を可能とするレベルである。例年、留学開始時の9月上旬と12月上旬の計2回HSKを受験し、学生の受験級は4級と5級が中心である。その受験結果である取得点を検討した結果、実質3カ月の現地学修では4級合格レベルに達することが可能であり、すでに4級レベルの語学力を持っている者および潜在能力の高い者は5級に合格可能である、ということになる。

【キーワード】

中国留学 セメスター留学 HSK 学修効果 中国語学習

はじめに

國學院大學（以下、本学と称す）では、平成19年度より現在に至るまで、毎年度中国語圏セメスター留学（以下、セメスター留学と称す）を実施している。この制度は、高い中国語力の習得を目的とし、1学期間の留学を行うものであるが、参加学生の満足度は非常に高い⁽¹⁾。しかしながら、満足度は学生の主観に基づくものであるから、留学効果を客観的に測ることが必要である。セメスター留学の効果測定のために参加学生には中国語検定試験であるHSK（詳しくは後述）の受験を課しており、本稿は、このHSKの成績を対象に、留学の学修効果検証を試みるものである。なお、筆者は第5回（平成23年度）から第8回（平成26年度）まで計4回の引率業務を担当しており、その4回の留学を対象とする。

セメスター留学制度の概要

1) 実施時期と参加者

セメスター留学は、9月から12月までの4カ月間、中国語圏にある本学の協定校で中国語を中心とした学修を行い、そこでの在学期間と得た成績を本学での修業年限と要卒単位に読み替えることができる制度である。

始めは文学部中国文学科のカリキュラムの一部として設計され、第4回までは中国文学学科生のみが対象であったが、第5回から全学部生が参加可能なものとなった。中国文学

科の学生は第3セメスター（2年次後期）で参加するが、他学科、他学部生は3年次でも参加可能である。学部により所謂第2外国語⁽²⁾が必修科目ではなくなったためか、文学部以外からの参加は多くはないが、それでもほぼ毎回若干名が参加している。

中国文学科学生が第2年次後期に参加することを想定しているため、参加学生の中国語レベルは中国語学習歴一年半程度を想定している。セメスター留学制度導入後数年は留学参加要件としての中国語レベルの設定はされていなかったが、留学の学修効果を高めるために、第7回からは所定の科目の修得等の参加資格が設定された。

2) 留学先と学修内容

初回から第7回（平成25年度）までは南開大学（天津市）で行われた。南開大学漢語文化学院（以下、漢語院と称す）に所属し、毎週月曜日から金曜日まで午前中2コマの中国語の授業を受ける。クラスは本学からの学生のみで構成され、レベルは漢語院の漢語進修生クラス初級2班に相当する⁽³⁾。参加学生全員を1クラスとする総合講座と、参加学生を2～3クラスに分けた少人数クラスで実施される会話中心の講座から成る。この他に、午後は週2コマの文化講座と、週1コマの本学引率教員による講座が実施される。文化講座は内容に応じて日本語通訳がつくことがあり、引率教員の講座は日本語で行われる。加えて、11月頃からHSK受験対策4級および5級の2クラスの補習講座も実施される。

平成25年頃から天津・北京・華北地区の大気汚染が深刻なものとなったため、第8回（平成26年度）は復旦大学（上海市）に変更となった。復旦大学中国語文学系において本学学生向けプログラムとして実施され、使用教科書は南開大学漢語院でのそれと同じであり、授業レベルも同等に設定された。本学学生のためのクラスであるのは前年度までと同様である。ただし、平成25年11月末頃から上海市の大気汚染も深刻化したことを承けて、9月から11月の3カ月間という変則的なものになった。従来4カ月実施されていた留学を3カ月に変更するに当たり、単位認定数を極力維持するために、時間割は例年に比べて過密なものとなった。また、留学参加者数の条件上、少人数クラスは実施されず、HSK対策講座も4級対策の1クラスのみとなった。

平成27年度は、大陸の大気汚染を避けて台湾にある協定校（南台科技大学）で従来通りの4カ月間の留学として実施されている。教科書は前年度までと異なり、台湾のものを使用しているが、レベルとクラスの形態は前年度までと同様である。HSKは台湾では実施されないが、前年度までとの比較の便もあり、参加学生は留学前後に日本で受験することになっている。

HSK 受験結果に見る学修効果

1) HSK の概要

HSK（漢語 Hànyǔ 水平 shuǐpíng 考試 kǎoshì）は中国国家教育部直属の国家漢辦が主宰

する中国語検定試験である。筆記試験は1級から6級まであり、6級が最高レベルである⁽⁴⁾。セメスター留学者が受験する目安は4級と5級である。

4級はCEF（ヨーロッパ言語参照枠組み）のB2に相当するとされるが、中国語学習歴2年程度、常用語彙数1200を目安とする⁽⁵⁾。設問は全部で100題、うち聴力45題、閱讀40題、書写15題とされ、各100点の合計300点満点である。180点以上が合格となる。

5級はCEFのC1相当とされ、中国語学習歴2年以上、常用語彙数2500を目安とする。設問は計100題、うち聴力45題、閱讀45題、書写10題、各100点の300点満点であるが、平成25年度より合格不合格の区分は廃止された。

いずれも、試験の進行は中国語で行われる。

2) HSKの受験結果について

南開大学留学時には、学生は9月上旬と12月上旬に現地でHSKを受験した⁽⁶⁾。復旦大

【表1-1】年度別4級受験結果

		合格者／受験者 (人)	受験者合格率 (%)	参加者合格率 (%)	平均点	最高点	最低点
H23 (26)	①	2／26	7.69	7.69	134.1	201	84
	②	14／18	77.77	53.84	221.5	262	167
H24 (38)	①	9／33	27.27	23.68	161.7	225	114
	②	20／21	95.23	52.63	218.6	263	169
H25 (23)	①	7／18	38.88	30.43	171.3	216	120
	②	8／8	100	34.78	224.9	258	205
H26 (20)	①	4／19	21.05	20	168.1	279	125
	②	8／8	100	40	214.2	243	186

【表1-2】年度別5級受験結果

		合格者／受験者 (人)	受験者合格率 (%)	参加者合格率 (%)	平均点	最高点	最低点
H23 (26)	①	—	—	—	—	—	—
	②	7／7	100	26.92	205.4	219	184
H24 (38)	①	3／5	60	7.89	192.4	271	124
	②	9／17	52.94	23.68	190.1	246	151
H25 (23)	①	1／4	25	4.34	149.5	184	120
	②	15／16	93.75	65.21	211.9	241	176
H26 (20)	①	—	—	—	—	—	—
	②	5／13	38.46	25	173.5	272	120

※ 平均点は小数点第2位を四捨五入。 —は受験者なし

学中文系ではHSKを実施していないため、7月と12月にともに日本で受験した。前3回と平成26年度では1回目の受験時期が異なるが、2回目試験までの留学期間自体はいずれも3カ月と考えられ、12月のHSK受験結果は実質3カ月の留学期間の学修効果を示すものと言える。

前頁の【表1-1】【表1-2】は、過去4回分のHSK受験結果を示したものである。表の数値について、説明を加える。

各表左側は留学年度であり、同じ欄の（ ）は留学参加者数である。年度によって参加人数の増減があり、また男女比率の違いも大きい。他学部生の参加もあるが、極めて少数である。学生が特定されることを避けるため、本稿では学科、学年、性別の属性は扱わない。

各表各年度の①は1回目受験（9月もしくは7月）を指す。平成26年度は学修効果を測定しやすくするため全員に4級受験を求めたが⁽⁷⁾、それまでは学生が受験級を決めていた。そのため、年度によって受験者数のバラつきが生じている。年度によっては6級⁽⁸⁾を受験した学生も数名いるが、セメスター留学の学修内容は6級受験を想定していないため、本稿では6級受験状況については取り上げない。

各表各年度の②は2回目受験（12月）を指す。2回目は学生が受験級を決めるが、複数級を受験する学生や、欠席した学生、6級を受験した学生もいるため受験者合計は参加者数に一致しない。受験級を決めるにあたっては、4級に合格した学生は順当に5級を受験するが、4級に不合格だった場合は4級と5級を受ける者、5級のみを受験する者、4級のみを受験する者の3種類に分かれる。

各表の「受験者合格率」は受験者数を母数とした数値であり、「参加者合格率」は未受験者も含む留学参加者数を母数とした。「参加者合格率」は、1回目と2回目で受験状況が異なることを承けて、比較の便を考慮して求めたものである。

また、5級は平成25年度より合格不合格の別がなくなったが、以前は180点以上が合格とされていたため、平成25年度以降も180点以上を合格相当として計上した。

「平均点」「最高点」「最低点」は、受験者全員を対象とした。

次に、これらの数値について考察を行うが、表ごとに見ていく。

【表1-1】年度別4級受験結果について。

平成23年度は1回目受験での合格率が10%に満たないものであったが、2回目受験では受験者の8割弱、参加者全体でも半数以上の学生が合格しており、顕著な伸びを見せている。平成24年度は、1回目受験の合格率は1年目より高かったが、2回目受験での参加者合格率は平成23年度とほぼ同じである。平成25年度は1回目受験での合格率は前年度より高いが、2回目受験の合格率は前年度より下がっている。これは5級合格者が多かったためであり、この点については後述する。平成26年度は、2回目の4級参加者合格率が例年より低めである。

2回の平均点を比較すると、どの年度も上昇している。点差が少なかったのは平成26年度の46.1、大きかったのは平成23年度の87.4である。1回目受験の平均点はいずれも合格

点には及ばず、2回目受験の平均点はいずれも合格点を30点以上、上回っている。最高点も平成26年度を除き、1回目を上回っている。最低点はどの年度も大きく向上している。

平成23、24年度は不合格者がいるが、平成25、26年度はいない。前述のように第7回（平成25年度）からは参加資格を設けており、これがその背景となろう。つまり、現行のセメスター留学の最低限の学修成果はHSK 4級取得であると言える。

【表1－2】年度別5級受験結果について。

平成23年度は、【表1－1】で見た1回目受験状況を踏まえると、学力が大きく向上した学生が複数いることが理解できる。1回目の4級参加者合格率7.69%に対して、2回目の5級参加者合格率が26.92%であるが、これは2回目の5級合格者に1回目4級不合格者が含まれているからである。4級不合格レベルでも、3カ月の現地学修で5級に合格可能であることを示している。この点については、改めて後述する。

平成24年度の受験者合格率は前年度より下がるが、参加者合格率は前年度とあまり変わらない。平成25年度は5級2回目受験の参加者合格率が非常に高く、【表1－1】の4級2回目参加者合格率が低い、これは2回目の5級受験者及び合格者が多かったことの現れでもある。この年度は、4級の1回目参加者合格率が例年より高めであり、参加者の中国語レベル自体が高めであったと言えよう。平成26年度の受験者合格率は4回のうち最低ではあるが、参加者合格率自体は平成23年度、24年度と近い数値である。この年度は5級対策講座が実施されなかったため、5級合格相当に達するのは学生の自主学修のみに懸かることになるが、それでも参加者の4分の1は5級合格レベルに達することが可能であることが理解できる。この5級の受験状況について、別の数値を見てみることにする。

【表2】について説明すると、「4〇5×」とある「4」は1回目受験級、「5」は2回

【表2】受験型別5級受験結果

	H23		H24		H25		H26	
	該当者の有無	平均点	該当者の有無	平均点	該当者の有無	平均点	該当者の有無	平均点
4〇5〇	有	—	有	①199.25 ②215.12	有	①194.71 ②221.28	有	①221 ②214.66
4〇5×	0	—	0	—	0	—	0	—
4×5〇	有	①157 ②201.8	有	—	有	①163.25 ②197	有	—
4×5×	0	—	有	①154.66 ②158.83	0	—	有	①152.12 ②150.12
5×5〇	0	—	0	—	有	—	—	—
5×5×	0	—	有	—	有	—	—	—

※平均点は、3人以上の場合のみ算出した。

目受験級を表し、○は合格もしくは合格相当、×は不合格もしくは不合格相当を意味する。受験型によっては1名しか該当しない場合もあり、学生の特定を避けるために受験者の実数は挙げていない。平均点の①は1回目受験、②は2回目受験を意味する。表中、数値のある例はいずれも1回目が4級、2回目が5級である。

どの年度も、1回目に4級に合格した者は、2回目に5級に合格していることがわかる。また、年度によって人数の違いはあるが、毎年度1回目は4級不合格ながらも2回目は5級に合格した学生が存在している。比較的該当学生が多いのが平成23、25年度である。この平成23、25年度の4×5○型4級受験時の平均点と、平成24、26年度の4×5×型4級受験時の平均点を比較すると、平成25年度と26年度の平均点には10点以上の差があるが、平成23年度と24年度の平均点は大差ない。平成26年度は5級対策講座が実施されなかったが、平成24年度は実施されており、対策講座を受講したとしても5級合格相当は留学の学修効果として保障できないと言える。通常の授業内容はあくまでも初級2レベルであって、HSK 4級受験を想定していることも背景にある。平成24、25年度の、2回とも5級不合格のわずかな例も、5級合格相当は保障できないことを示すものであろう。その一方で4級不合格ながら3カ月で5級に合格した複数例は、かえって学生個人の潜在能力の高さを窺わせるものである。留学中に5級対策講座が実施されなかった平成26年度も合格者がいることを踏まえれば、尚更である。

以上に見てきたHSK受験結果に関する考察を総括すると、多くの学生が実質3カ月の現地学修で4級合格レベルに達することが可能であり、すでに4級レベルの語学力を持っている者および潜在能力の高い者は5級に合格可能である、ということになる。

なお、試みに入試区分とHSK受験結果の関連を調べたことがある。年度によっては特定の入試区分と受験結果の間に明らかな相関が見られたが、相関が見られなかった年度もあり、継続した調査は行わなかった。

また、今年度は台湾で実施されており、授業内容も例年とは異なるため、上述の総括が該当するかどうか結果が待たれるところである。今後しばらくは台湾での留学が想定されており、台湾での留学の成果については改めて検討する必要がある。

効果的な留学制度について

上に述べたように、昨年度までのセメスター留学制度は、HSK 4級取得レベルを概ね可能なものとする。5級レベルの取得可能性は、学生個人の能力と努力とに左右される。

このことを踏まえ、効果的な中国留学制度についての私見を述べる。

1) セメスター留学制度の現状を維持する場合。(学修成果を4級取得に設定し、現行の本学学生のみで構成されたクラスでの学修を実施する。)

在学中の早い段階でHSK 4級取得を考えている学生には、セメスター留学への参加を

推奨する。2年次の留学で4級を取得して帰国後も学修を継続すれば、在学中に5級を取得することは難しいことではない。留学参加までに4級を取得している学生は、セメスター留学期間は補講や自主学修で5級取得を目指す。

留学前に5級を取得している学生に対しては、セメスター留学ではなく協定留学や公費留学への応募、もしくは私費による留学を推奨する。学生の能力および努力、留学期間によっては在学中に6級取得が可能である。

2) セメスター留学制度を見直す場合。

留学前に4級を取得している学生に対して、より高い学修効果を得る機会を提供するために、留学先での参加クラスの選択の幅を広げる必要がある。近い将来に、参加学生を複数の協定校に分散させる少数分散型セメスター留学制度に移行する予定とのことである。そうなれば、学生のレベルに応じて参加クラスを選択することが可能になるため、HSK受験結果に見る学修効果にも変化が生じることが予想され、より個々の学生に適した留学制度として運営されることが期待できる。

大学のカリキュラムの中に留学を組み入れる以上、帰国後の継続学修についても考えなければならない。留学経験者が受講する3年次開講中国語科目は、最低限4級取得者に適切なレベルでなければならない。5級取得者も少なからずいるため、5級取得者向けの講座もあるのが望ましい。

また、高い学修意欲を持つ学生に対しては、課外の外国語自主学修を支援する組織であるランゲージ・ラーニング・センター（LLC）が、留学の学修効果を継続させることを目的とした講座等を準備することが可能である。HSK 5級や6級対策講座、留学後の会話能力を維持、向上させるためのネイティブ講師による講座等が想定される。

なお、本学の「21世紀研究教育計画（第3次）〈修訂版〉」の「グローバル人材育成の推進」の「取り組みのための目標値」は「HSK 5級180点以上、30名」となっている。本稿に述べた過去4年間の数字を見る限り、留学参加者が帰国後も継続して学修していれば不可能な数値ではない。セメスター留学以外の留学を選択している学生もいるため、十分実現可能な数値であろう。

むすびにかえて

—日本人中国語学修者の留学について—

以上に、過去4回のセメスター留学参加者のHSK受験結果に見る学修効果の分析を行った。最後に、4回の引率を経験した教員として、本制度への見解を述べておきたい。

セメスター留学は、本学学生のみでクラスを構成する。そのメリットとしては、留学することへの不安の解消もしくは軽減、学生同士で切磋琢磨する環境の醸成、が挙げられる。デメリットとしては、日本人が常に周囲にいることによる中国語を使用する機会の減少、

が最たるものである。

引率時にHSK受験をめぐって中国の教員と意見を交わす際に、いつも提示されるのは「4級受験が適切である」「5級は難しい」という見解である。しかし、実際には5級レベルに達する学生も複数存在する。筆者は当初、先方の教員は学生の能力を見くびっているのではないかと考えていたが、そうではなく、教員が判断の基準としているのは学生の会話能力であるということに気づいた。HSKでは会話能力の学修効果を測ることはできない。しかし、たとえば南開大学漢語院の初級2クラスを受講している他国や日本の留学生と、本学の参加学生の会話力には大きな隔たりがある。これは筆者が実見したことであり、セメスター留学に参加した学生も実感したことである。その理由は、ひとえに先にあげたデメリットによるものである。別稿にも述べたが⁽⁹⁾、日本人は母国語においても漢字を使用しているために、中国語の読み書き能力は習得しやすいが、発音や会話の習得はそれに劣る。学校英語では会話能力が伸びないとの指摘があるように、言語の種類に関わらない日本人の外国語学修上の傾向でもあるのかもしれないが、中国語に関してはそれが顕著である。その欠点を補うためにも、中国語を使わざるを得ない環境に身をおくことが必要であり、それを可能にするのが留学なのであるが、現行制度はその良さを損なっている。

日本語の使用機会を減少させることによって学修効果を高め、多くの留学生にも接することによって学生の国際的視野を広げることも期待できる、少数分散型セメスター留学制度への早期移行を求めて、筆を擱く。

注

- (1) 第5回から第8回までの参加者アンケートのうち、参加してよかったかを尋ねる項目の回答を挙げる。第5回（回答率96.15%）回答「よかった」100%（%は回答者数を分母とする。他の選択肢は「悪かった」「どちらとも言えない」）。第6回（回答率94.73%）回答「よかった」94.44%、「どちらかと言えばよかった」5.55%（他の選択肢は「どちらかと言えば悪かった」「悪かった」「どちらとも言えない」）。第7回（回答率95.65%）回答「よかった」100%（他の選択肢は第6回に同じ）。第8回（回答率90%）回答「よかった」83.33%、「どちらかと言えばよかった」16.66%（他の選択肢は第6回に同じ）。
- (2) 本学文学部では選択必修外国語としてドイツ語・フランス語・中国語（学科によってはロシア語・韓国語も）から履修することになっているが（一部学科を除く）、他学部では選択外国語としてその履修は学生の自主性に委ねられている。
- (3) 使用教科書は、北京語言大学出版社の『発展漢語』の初級Ⅱシリーズである。
- (4) 口語試験もあり、初級・中級・上級の三種ある。
- (5) 漢語考試服務網による。[http://www.chinesetest.cn/gosign.do?id=1 &lid= 0 #](http://www.chinesetest.cn/gosign.do?id=1&lid=0)
- (6) 11月に任意で受験する学生もいるが、本稿では取り上げない。
- (7) 4級を取得済みの者は受験免除とした。
- (8) 6級は、語彙数5000以上を目安とする。設問は、聞き取り45題、読解50題、作文1題、各100点の合計300点。作文は、与えられた文章を読んだ後に400字以内で要約するものである。
- (9) 「ランゲージ・ラーニング・センター開設のコンセプト」（『國學院大學教育開発推進機構紀要』第6号、平成27年3月）